

# ホーソーン作品における女性像の研究

——「救いの女性」から「透明人間」へ——

山本 雅

- I. 「若きグッドマン・ブラウン」
- II. 「ラバチーニの娘」
- III. 「あざ」
- IV. 『緋文字』
- V. 『ブライズデイル・ロマンス』他
- VI. 『七破風の屋敷』

日本や世界において、女性問題への関心が高まっている。今年（1995年）は中国において、国際連合の主催による世界女性会議が開催された。また、日本においてはフェミニズム運動の高まりと共に、家族法を改正し、夫婦別性を採り入れようとする社会的気運が高まっている。こうして、女性のより一層の地位の向上、権利の一層の拡充へ向けての幅広い運動が積極的に展開されている。

現在の日本および世界におけるこのような状況は、19世紀中葉のアメリカ社会における状況とよく似ている。もちろん、現在と当時の女性の置かれた立場は全く異なっているが、当時も女性の権利運動が積極的に展開された時代であった。アメリカ各地に女性の権利の拡充をめざす団体が設立され、激しい運動が展開された。1848年にはニューヨーク州のセネカ・フォールズにおいて、初の全米女性権利運動大会が開催された。

アメリカの19世紀前半を生き抜いた作家ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) は、生涯において約100本の短編、それに4つの長編作品を創作したが、その中に数多くの女性たちを登場させた。そして、それら女性たちの中に、我々は作家ホーソーン的女性像を発見する。その中で、とりわけ私の関心をひく事実は、その女性像が多かれ少なかれ、当時の女性の権利運動を反映したものになっているということである。

以下に私は、ホーソーン作品に現れた女性像を検討し、その中に当時の女性の権利運動に対する作家ホーソーンのどのような思いが込められているかを考察したい。

## I. 「若きグッドマン・ブラウン」

ホーソーン作品における女性像は、作者ホーソーンの伝記的事実によってだいたい説明できると私は考えている。その一つの流れは、彼が結婚前に抱いていた女性像であり、それは得体のしれない神秘的な存在としての女性であり、性的魅力に富み、男性を破滅にも、あるいは救済にも導く力を持っている女性である。もう一つの流れは彼が結婚後に抱くことになった女性像であり、優しく、しとやかで、従順な女性、いわゆる「お上品な伝統」を地でいくような存在としての女性像である。この二つの流れを、私は今ここに便宜的に、結婚前と結婚後に分けたが、それは正しくないかも知れない。この二つはもともと初めからホーソーンの中にあり、それが時や場合に応じて、前者が表に出たり、あるいは後者が特に強調されたりしているのかも知れない。しかし、後者、つまり従順な、おとなしい女性が強調され始めるのはまぎれもなく、ホーソーンが結婚してからである。

得体の知れない、神秘的な魅力を備えた女性像の

キーワード：「あざ」、ケニオン、女性の権利運動、ゼノビア、『大理石の牧羊神』、『七破風の屋敷』、ノヴェル、フィービー、ヒルダ、『緋文字』、『ブライズデイル・ロマンス』、ヘスター、ホーソーン (ソフィア)、ホーソーン (ナサニエル)、『ラバチーニの娘』、ロマンス、『若きグッドマン・ブラウン』。

初めは、「若きグッドマン・ブラウン」(Young Goodman Brown, 1864)の中に見受けられる。セイラム村の住民で結婚して3ヶ月しかたない男ブラウンは、ある夜、妻フェイスを家に残して近くの森へと入っていく。夜の森の中を奥へ奥へと進んでいくと、ブラウンはやがてひろびろとした場所に着く。そこでは松の木がまるで蠟燭のように燃え上がり、広場を照らしている。その広場には、彼が平素、町で見ている殆どの人々が集まっている。それは魔女の集会のようである。ここで、ブラウンが他の何よりも驚いたことは、自分の妻のフェイスがそこに来ていることである。会衆の中のリーダーとおぼしき人物は、ブラウンとフェイスを前に呼び寄せ、血による洗礼を二人に施そうとするに及んで、ブラウンは「フェイス、悪に最後まで抵抗せよ！」と叫んで、気を失う。そしてしばらくして、気がついてみると、時刻は朝であり、辺りには誰もいない。これ以後、ブラウンは、自分の妻をも含めて、全ての人間が信用できない陰鬱な男になってしまう。ブラウンの森での経験が、彼の全てを狂わせてしまったのである。

ブラウンの経験は夢であったのか、現実のことであったのか不明であるこの物語に、私はホーソーンの片方の女性像の原点があると考えている。この物語を、コナリー (Connolly 1956: 365) やマケイサン (McKeithan 1952: 93) のように、ピューリタニズムの教義に対するホーソーンの攻撃であると理解するのはオーソドックスな解釈であるが、私はこの物語でホーソーンが一番訴えているのは、女性存在の不思議、特にその性的側面であると思う。ブラウンとはどこにでもある名前であり、その意味でそれは世の男性全てを象徴している。彼は「結婚してまだ3ヶ月だ」とあるが、作品の中でこれ以外に彼が、わざわざ森の中へ出掛けていく理由は見あたらないのである。結婚した彼にとって一番ショッキングな事実、妻とのセックスであった。普通の男性なら、妻とのこのような性の事実を通して、さらに人間的に成長していくわけであるが、ブラウンにとっては、これが余りにも衝撃的であった。そしてこんな事をしているのは自分だけなのか、それとも世間の人は皆こういうことをしているのかと疑問に思わずにはおれなかった。森の中での彼の発見は、牧師であれ、教師であれ、女性であれ、男性であれ、全ての人が自分と同じような罪深い(と彼には思えた)ことをしているとの発見、あるいはその再確認であった。

そしてこの点でピューリタニズムが関係してくるわけであるが、ピューリタンたちは特にセックスを「肉欲」(Carnal Sin)として、抑圧する傾向が強かった。ブラウンは小さい時からそのような教えを受け、教義問答で鍛えられてきたわけだが、女性とのセックスのことまで教えられはしなかったのである。森の中で彼が、教義問答を教えてくれたまさにその女性が森の集会に参加しているのを見て驚愕するのは、以上のようなコンテキストにおいてである。湾植民地のピューリタンたちは、実際には「バンドリング」(婚約した者同士が、二週間の間一緒に生活を共にする試験結婚みたいなもの)と呼ばれる慣習を持っており、セックスに関しては、意外に現実的であり、寛容であったわけであるが、ホーソーンはそれには言及せず、ピューリタニズムの性に関する厳格な一面をわざと強調しているようである。

森の中でのブラウンの発見(町の全ての善良な人々は皆肉欲の罪を犯している)は彼を驚かせたが、生涯彼を陰鬱な、人間嫌いにしたのは彼の妻のフェイスまでもがそこにいた事実である。彼にとって、フェイスは清浄、無垢、純粹の権化であった。彼女のピンクのリボンはそのことを一番端的に表している。森の中にさらに深く進むべきかどうか、彼が躊躇しているとき、空からピンクのリボンが落ちてきて、自分の妻までもが罪ある存在だと分かるやいなや、彼はまさに悪鬼のようになって、意を決して森の中へ進んでいくのである。自分が尊敬し、いちばん愛していた女性も肉欲の罪の例外ではないという発見は、彼にとっては仰天動地の発見であった。ブラウンのこのような発見を、ロイ・メイルは、「女性存在の曖昧性」と呼んでいる。どんな清浄・無垢な女性にも肉欲・性欲があり、そのようなことを含めて女性を受け入れることが、女性を愛することの意味であるが、ブラウンはそれはできなかったとメイルは述べている (Male 1957: 77-79)。

このような解釈に対して、「若きグッドマン・ブラウン」における、いわゆる「罪」というのは、キリスト教で言う罪、つまり人間の「原罪」という、より普遍的な意味での「罪」ではないかという反論が出てくると思うが、この作品における「罪」はその重点が肉欲という「罪」に置かれていると私は考えている。それは物語の最後に悪魔とおぼしき男がブラウンとフェイスを前にして行う演説によく表されている。この中でこの男が強調していることは、人間のセックスの罪ばかりである。「教会の牧師が

信者の女性を性的に犯し、その女性は不義の子を密かに始末した」というようなことを言っている (Hawthorne 1854: 103)。また、この作品において「罪」がいわゆるキリスト教の「原罪」ではなく、肉欲という「罪」に重点が置かれていることは、この作品のイメジャリーに最もよく現れている。まず最初に、ブラウンが森の入口で待ち合わせていた男が持っている「杖」があげられる。これは「蛇のように動く杖」と描写されているが、この男は、この「杖」で前を行く女性に触れたりしている。また、ロイ・メイルが正しく指摘していることであるが (Male 1957: 78)、周囲にうっそうと木々が茂る、その中央に4本の松が赤々と燃えさかるという状況は女性の性器をシンボライズしている。更に驚くべきことは、ブラウンが暗い森に分け入り→中央に行き→血の洗礼を施され→気を失う、というこの物語の構造全体が、ブラウンにとっての女性との性的結合の全体を象徴的に表している。だからこの行為は、それが夢であろうと現実であろうと、ブラウンに与える心理的インパクトは非常なものがあるのである。このような性的結合の夢（これを夢だとすると）の後、家に帰る途中ブラウンは妻のフェイスに出会うわけであるが、彼はもはや純粋な気持ちで妻に接することが出来ない。

19世紀前半という、性に関することは口にすることすらはばかられた時代にホーソーンがこのような女性像を提示したということは驚きである。ホーソーンはそれを表向きに表現するのではなく、あくまでイメジャリーという形で「地下運動的」に表現している。万が一、世間からとがめられても、ホーソーンは「私はセックスのことなど全然描写しておりません」と平気で言い逃れることが出来るのである。また、ホーソーンがこの作品で問題にした性的欲望の対象としての女性、かつまた精神的愛情の対象としての女性という二律背反的問題は、時代を超えて、我々現代人にも通用する内容を持っている。

## II. 「ラパチャーニの娘」

ホーソーンが「若きグッドマン・ブラウン」において問題にした女性像は、さらに芸術的な形で「ラパチャーニの娘」(Rappaccini's Daughter, 1846)において展開されている。両作品の間には創作年月日において9年の隔りがあるが、私は本質的に両作品は同じことを問題にしていると思う。南イタリア出身の青年ジョバンニは、パジュア（今のパドバ）の

医科大学で勉強するためにやってくる。彼が下宿した場所は、かつての貴族の大邸宅であつたらしく、大きな花園を有している。ところが、この花園は普通のそれではなく、得体の知れない不気味な花や植物で満ちている。この邸宅にはラパチャーニ博士とその娘のベアトリーチェが住んでいる。やがてジョバンニは、ベアトリーチェと知り合いになるが、この女性というのが非常に純真素朴で、快活な女性であるが、実は父親の科学の力によって猛毒を有する存在となっている。この女性に触れるものは、それが昆虫であれ、人間であれ、たちどころに命を失うのである。このことを知ったジョバンニは、パジュア大学の彼の指導教官であるバリオーニ教授から貰った解毒剤をベアトリーチェに飲ませ、彼女の毒を除去しようとするが、その結果ベアトリーチェは死んでしまう。死にぎわに彼女は「初めから私の体の中よりも、あなたの中により多くの毒がありはしませんでしたか」という忘れがたい言葉を残す。

この物語の最初に作者がダンテに言及していることは非常に重要である。ダンテの『神曲』において、主人公ダンテは、詩人ヴェルギリウスに伴われて「地獄界」「煉獄界」「天堂界」と世界旅行をしていくわけであるが、それぞれの部分を通過する際に彼は魂の浄化を経験する。ヴェルギリウスは最初の二つの部分においてダンテに随伴するが、最後の部分においては「自分はこの先を案内するほどの資格がない」と言ってお供を断る。「天堂界」を案内するのは、そこに住まう4人の淑女の一人であるベアトリーチェである。そしてベアトリーチェの助力と善導でもって、ダンテは至高天において神の聖顔を拝閲することが出来、魂の最高の浄化を経験する。つまり、ベアトリーチェはダンテの荒ぶる魂を導いて、天国においてこれを救う存在となっている。また、ダンテがその世界旅行の最初において、「暗闇の森」の付近で3匹の野獣に襲われて殺されそうになった時、彼の救済に乗り出したのもベアトリーチェであった。ここで展開されているのは、男性の魂の救済者としての女性のイメージである。

このような観点で「ラパチャーニの娘」を読んできると、この作品に展開されているベアトリーチェ（その名前に注意。その他、ジョバンニ、ジアコモ〔ラパチャーニ博士〕、ピエトロ〔バリオーニ教授〕といった名前も全て天堂界の聖人たちの名からとられている）の女性像がはつきりするであろう。つまりこの作品において、作者ホーソーンはジョバンニの魂の救済者としてこの女性を提示しているのであ

る。したがって、ジョバンニにとって、この女性を愛し、この女性を信じ、この女性の教導に従うことが、彼の魂の唯一の救済につながるはずであった。

ところが、そして、ここがロマンス作家ホーソンの作家として面目躍如たる所であるが、ダンテのベアトリーチェと違って、このベアトリーチェはどす黒い秘密を有している。それは、この女性は科学者の父によって「この世で存在するもっとも恐ろしい毒を持った存在」に変えられてしまっている。ベアトリーチェ自身もこのことを良く知っているからジョバンニ青年には指一本も触れないし、「服の裾さえもジョバンニにあたらないようにしている」のである。彼女の息を吹きかけられた昆虫はたちまちにして死んでしまう。だから、ジョバンニとて彼女に触れようものなら即死してしまうのである。

このベアトリーチェの「毒」をめぐるさまざまな解釈が出され、この短編「ラパチーニの娘」をホーソンの作品の中でも最も解釈の困難なものにしているわけであるが、私はホーソンにおける女性像の研究から、それは女性の持つ性的側面、つまり、男性にとっての得体の知れないもの、肉欲の対象としての女性の持つ魅力の象徴的表現であると解釈したい。天堂界に鎮座する純粋無垢のベアトリーチェのような女性であっても、彼女が女性であるかぎり、男性にとってはそれが肉欲の対象であることは確かである。一人の女性を自分の愛するものとして受け入れるということは、清浄無垢とか純真素朴とかの精神的価値を受け入れると同時に、肉欲の対象としての女性を受け入れることである。それは、いうなれば「清濁併せ飲む」ということである。

南イタリア出身で直観力の発達したジョバンニ青年は、ベアトリーチェの持つ精神的側面——彼女の優しさ、素朴さ、素直さ——はよく理解できた。彼が彼女を好きになるのはそのためである。しかし、彼にどうしても出来なかったことは、彼女の「毒」によって表現されている汚れた面、「濁」の面を受け入れるということである。ジョバンニ青年にとっては、「目で見るもの、手でさわることのできるもの」の存在があまりに大きく、ベアトリーチェの全てを受容することができなかった。

ただ、ジョバンニ青年を弁護して言うならば、相手の女性の欠点というのが、性格であるとか、思想であるとかの自分の身体に直接的には「無害」のものであるなら、上記のようなことも可能であろうが、相手の女性の欠点なるものが、接触したら自分の命に関わるような「有害」なものであるなら、ジョバ

ニ青年の危惧も当然のことと思われる。私の上記の解釈もそこが最大の難点であるわけだが、これは現代において「エイズ」という病気に関連づけて考えれば多少とも納得がいくかも知れない。新聞等において、エイズに罹患している相手との結婚が報道されているが、そのような、自分にとってひょっとしたら致命的にさえなりかねない状況をも乗り越えての男女の深い愛ということもあるのである。私はホーソンが「ラパチーニの娘」で展開しているストーリーは、一見非常に極端なことを言っているように見えるが、先の「若きグッドマン・ブラウン」の場合と同じように、ある意味では極めて現代の我々の身近かなことを言っていると思う。

### Ⅲ. 「あざ」

ホーソンの作品における上記のような女性像——ダンテの『神曲』のベアトリーチェに見られる、荒ぶる男性の魂の救い主というイメージ——は、ホーソンの専売特許ではなく、西洋文学における伝統的な女性像である。このような女性像は、一般に「救いの女性」(Spiritual Women)と呼ばれる。その典型は、シェイクスピア作『リア王』の中のコーデリアであり、ゲーテ作『ファウスト』の中のグレーチェンである。これら女性たちはいずれも精神の荒野にさまよう男性たちに救いの手をさしのべ、最後には自らが犠牲になることによって男性の魂を浄化する作用をしている。だから、ホーソンはだいたい西洋文学の伝統に基づいた女性像を展開していたことになる。その中にホーソン独自のものを求めるとすると、それは肉欲の対象としての女性という側面を導入して、別の角度から、「救いの女性」の問題を考察したことであろう。

ここでもうひとつだけ、このような女性像が展開されているホーソンの作品を検討しておこう。この作品を落とすことはホーソンの作品における女性像を検討することにおいて、片落ちになると思うからである。その作品は『あざ』(The Birthmark, 1846)である。

非常に有能な化学者エイルマーは、当時稀に見るほどの美人であるジョージアナと結婚する。ところが、この美しいジョージアナにはたった一つの醜い欠点があった。それは彼女の左の頬にある赤いあざである。理想家の夫エイルマーは、次第にこのあざに我慢ならなくなって、そのことを妻のジョージアナに話す。はじめは気にとめなかったジョージアナ

も夫の再三の求めに応じて、ついに化学の力でこのあざを取り除くことに同意する。エイルマーは治療のために、彼女を実験室の隣にある婦人用の私室に連れていく。そこは絨毯が敷かれ、ランプの灯された美しい部屋である。ここで夫は、彼女の顔にランプの光をあてたり、芳香を部屋に充満させたりして彼女の治療を試みるが効果はない。やがてジョージアナはこの婦人用の私室を抜け出して、隣の実験室に行く。そこでは夫がさらに強力なあざ取りの薬を調合している。意を決したジョージアナはついにこのあざ取りの薬を飲む。すると次第に彼女の頬のあざの色が薄れていき、とうとう完全に消滅する。これを見て夫は有頂天になって喜ぶ。エイルマーの実験の助手をつとめている粗野な男アミナダブはこれを見て、「俺だったらあのあざを決して手放さないぞ」と言ってゲラゲラ笑いだす。それで目が覚めたジョージアナは夫に、「自分はもう死にかけているが、あなたは理想を追求したのだから決して後悔しないように」と言い残して死んでいく。

この物語において、ジョージアナは美人で貞淑な妻として描かれており、あらゆる点においてエイルマーにとっては理想の女性である。だからエイルマーがすべきことは、彼女のあざも含めて、彼女の全てを受け入れることであった。そうすることによって、エイルマーは「人間という磁石の鎖」(magnetic chain of humanity) に連なり、最終的にジョージアナを通して彼の魂が天国へといざなわれるはずであった。しかし、エイルマーにとっては、「現在の状況が彼にとってはあまりにも強すぎた」(Hawthorne 1854: 69) ののである。

ここで展開されている女性像はまたしても、ダンテのベアトリーチェの女性像であり、男性の荒ぶる魂の救い主としての女性像である。ジョージアナは最後に自分の死をもって夫の間違いを諫めるわけであるから、これはまさに西洋文学の伝統として続いている「救いの女性」の典型である。この作品には、前述したような肉欲の対象としての女性という考えかたはあまり全面に打ち出されていないようだ。しかし、それでも、エイルマーの助手をつとめる粗野な男アミナダブが、エイルマーのやること全てを見ていた後、「俺だったら、あのあざを決して手放しはしないぞ」と言ってゲラゲラ笑う場面は非常に卑猥であるから、ホーソーン特有の女性に関する見方は生きてると考えるべきである。

一般にホーソーン作品の男性主人公たちは、どうしたものか女性を恐れているようである。特に女

性の持つ性的側面を恐れている。彼らは大抵の場合、上記のアミナダブのように「俺だったらあのあざを決して手放さないぞ」という具合に、性を性として受け入れ、それを素直に享受するという面に欠けている。これら男性主人公は、女性の持つ優しさとか、素直さ、純真さの特質をこよなく愛し、それにひかれるのだが、こと性的な側面となると何か汚らわしいものに直面したように反発してしまう。女性に関してその清濁を併せ飲むという鷹揚な面に欠ける。このことは「あざ」のエイルマー、「若きグッドマン・ブラウン」のブラウン、「ラパチャーニの娘」のジョバンニ、「牧師の黒いヴェール」(The Minister's Black Veil, 1837) のフーパー牧師、「美の芸術家」(The Artist of the Beautiful, 1846) のオウエン、また長編においては『緋文字』(The Scarlet Letter, 1850) のデイルムズデイル、『ブライズデイル・ロマンス』(The Blithedale Romance, 1852) のマイルズ・カヴァーデイル(彼は生涯独身であった)、また『大理石の牧羊神』(The Marble Faun, 1860) のケニオン等、ホーソーンの殆どの男性主人公に大なり小なりあてはまる。彼らは女性の持つ性という神秘的な面に深くひかれ、あるいはそれで時には罪を犯すのだが、徹底して女性との関係に深入りするということがない。一体これはどうしたことであろうか。

これは作家ホーソーン精神分析に深く立ち入ることであり、想像の域を出ないのであるが、私はこれはホーソーンの生いたちと関係があると見ている。ホーソーンは4才の時に父を失っている。それ以後母のエリザベスは生涯再婚することはなく、全く世捨て人ようになって、家にこもりきりの生活を送った。ホーソーンとの関係はうちとけた温かいものと言うよりも、遠慮がちなぎくしゃくしたものであった。また、ホーソーンにはエリザベス(この人も生涯独身を通した)という姉とルイズという妹がいた。つまり、ホーソーンは小さい時から女性たちばかりに囲まれて育ったわけである。このような状況でホーソーンが本質的に「女嫌い」になったとしても、不思議はないのである。女性に関して、ダンテのベアトリーチェ的なイメージは概念として理解できるとしても、性を伴う現実の女性にどう対処するかはホーソーンにとってはやっかいな問題であったはずである。ホーソーンは38才でソフィア・ピーボディと結婚するわけであるが、それまでの彼の作品における女性像はこのような彼の伝記的事実と無関係ではなからう。

ホーソーンの生涯の愛読書を2つあげるとすると、一つはジョン・バニヤンのキリスト教徒に関するアレゴリーである『天路歷程』であり、もう一つはサー・ウォルター・スコットの作品群である。特に後者は、家族団欒の場においてホーソーンが決まって朗読したものである。これは中世の騎士物語であり、そこに提示された女性像はあくまで美しく、優しく、純情可憐な乙女のそれである。当時の騎士物語において提示されている女性像はほとんどそのようなものである。特にホーソーンが好んだ作品はスコットの『アイヴァンホー』(Ivanhoe, 1820)であるが、この中に出てくるローエナ姫は、騎士アイヴァンホーの崇拜の対象であり、また逆に彼女は、騎士アイヴァンホーの荒ぶる魂を勇気づけ、善導する「救いの女性」としての役割を演じている。

ホーソーンの創作の原点は「スコットの真似をしない」という点にあったということは重要な事実である。スコットの作品において、善人は最後まで善人であり、悪人は最後まで悪人であった。白は最後まで白、黒は最後まで黒である。このようなことに反発し、果たして人間の心はそのように単純なものであろうか、というのがホーソーンのそもそもの問いかけであった。ある短編の中でホーソーンは「スコットがある時期に亡くなってくれたのは、いいことであった」と述べて(Hawthorne 1854: 416)、スコットの作風への訣別を宣言している。人間の心が白なのか、黒なのか分からなくなる灰色の瞬間こそが、彼の文学の対象とすべきものだとするホーソーンの直観はおおいに賞賛されるべきものであるが、こと女性像に関してはホーソーンはスコットと共通するものを多く持っている。特にホーソーンの短編に現れた女性像に関してはそのことが言えるのである。しかし、もちろん、ホーソーンが作品に主にイメジャリーを使って、性的側面・肉欲の面に関心を払ったことは、スコットがいずれの作品においてもしなかったことであり、これはホーソーンの作家としての慧眼を示すものである。

#### IV. 『緋文字』

しかし、ホーソーンが作品に表れた女性像が上記のようなものにすぎないのなら、それは当時の他の作家も多かれ少なかれ実践していることであり、とりたてて言うほどのこともないのであり、ホーソーンが作品における女性像として研究する価値もない

ことであると思われる。私がホーソーンが作品における女性像としてのテーマを設けて、これを研究する価値があると思うし、研究しなければならないと思うのは、それが当時の社会問題と結びついているからである。その社会問題とは、当時発生したばかりの女性の権利運動である。多くの短編作品において上述のような女性像を展開してきた作家ホーソーンは、当時の女性の権利運動の広まりの中にあつて、幸か不幸かこの問題に取り組みざるを得なくなったのである。

既に述べたように、アメリカにおける女性の権利運動は奴隷開放運動とともに進展していった。奴隷解放のために戦っていた女性たちは、奴隷の置かれている立場と自分たちの置かれている立場の類似性に気付いた。そして女性の社会におかれた立場について深く考えれば考えるほど、社会の全てが男性中心に組み立てられ、女性の権利が無視されていることに気付いた。その最たるものは女性の参政権であったが、これは女性たちがこれからその獲得のために半世紀以上も戦う必要のあるものであった。ホーソーンの姉のエリザベス、それに義姉のエリザベス、それに友人であり、当時の思想界の大物マーガレット・フラーは筋金入りの女性の権利運動家であった。特に義姉のエリザベス(この人も生涯独身であった)はボストンに小さな本屋を開業し、ここが女性たちの権利運動の拠点の一つになった。だからホーソーンは女性の権利運動の早い段階から、この問題に関心を持たざるをえなかったのである。

当時のアメリカの女性の権利運動家たちが、女性の権利運動のためのバイブルとして読んだ本は、イギリスのメアリー・ウルストンクラフトの書いた『女性の権利の擁護』(Wollstoncraft 1792)である。この本には既に、男性が doer であり、女性が civilizer であるとするような、人間を二つに分けるような考え方にいかにも多くの偏見と女性蔑視が内包されているかが指摘してある。ウルストンクラフトは「一つの基準」ということを繰り返し主張し、女性でも自由に人前で演説することも出来るし、商売にも参画でき、財産の所有もできると説いた。今では当たり前のこの主張も当時は全く異端視され、ウルストンクラフト自身は「魔女」だと思われた。そしてこの本の述べているさらに大切なことは、文学におけるダンテのベアトリーチェ的な女性像がいかに男性が勝手に造りあげた男性に都合のいい女性像であるかということである。文学において女性は「太陽」であるとか、「救いの女神」であるとか、

「母なる存在」として崇められてまつられ、その実、結婚し家庭に入ると、そこにあるのは夫が主、妻が従という隷属の関係であった。だからウルストンクラフトにとっては、結婚は男性のしかけた明らかなワナであり、結婚は「合法的売春」であった。

ホーソーンがウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』を読んだかどうかは定かではない。ケッサーリングの『ホーソーン読書一覧表』(Kesserling 1975)にもこのタイトルは掲載されていない。しかし、上述のような伝記的事実からホーソーンが女性権利運動家たちの主張には早くから接していたであろうし、なかんずく、1848年の全米女性権利運動大会における女性たちの「感情宣言」(The Declaration of Sentiments)は当時の新聞にもデカデカと掲載されたから、よく知っていたに違いない。この宣言の中には、今まで男性たちが、女性の無知、人のよさにつけこんで、いかに女性を卑しめ、隷属的地位におとしめていたかが、まぎれもない言葉で述べてある。このように書くとそんなに当時の女性たちがひどい扱いを受けていたのかと思うかもしれないが、マーガレット・サンガーが現われて産児制限運動を展開するのはこれからまだ半世紀後のことである。一人の女性による多くの出産、育児、家事労働を考えると、当時の女性の置かれた立場の劣悪さは相当なものだったと思われる。それに当時の世間における神話は「男性は毎日セックスをしないと死んでしまう」というものであった。したがって、男性へのセックスの相手をするのはまた女性に余分の負担として女性の上のしかかってくるのである。ホーソーン最高傑作である『緋文字』は以上のような時代背景のもとに書かれた。それは全米女性の権利大会開催(1848年)の2年後に書かれている。だからこれは、当時の女性たちの権利運動に対する作者ホーソーンの返答でもあるのである。

黒髪の女性ヘスター・プリンはチリングズワースという夫がありながら、マサチューセッツ湾植民地において教区牧師のデムズデルと不義密通の罪を犯し、子供まで出来てしまう。湾植民地の為政者たちは、ヘスターの胸に不義密通を表すAという印を生涯つけて暮らせという罰を課す。ヘスターの罪の相手である牧師は自分の地位や名誉のことを思うと、皆の前で罪を白状できず、秘密の罪を胸に抱いたまま暮らすことになる。オランダから湾植民地に戻ってきたヘスターの夫であり医師であるチリングズワースは直観でもって、牧師が自分の妻の密通の

相手であることを見抜き、牧師にたえずつきまとい、死ぬほど牧師を苦しめる。やがて7年後に、ヘスターは、牧師に実はチリングズワースは自分の夫であることを打ち明けると同時に、湾植民地から二人で船で脱出し、よその土地で子供のパールも含めて幸せに暮らそうと提案する。牧師は一度はこの計画に同意するものの、自分の余命がいくばくもないことを悟り、湾植民地の選挙祝賀会の演説をする日に死刑台の上にあがり、自分の罪を会衆の前で告白して、息たえる。この直後、復讐の対象を失ったチリングズワースは急に生命力が失せて、死んでしまう。ヘスターとパールはやがてヨーロッパへ出帆するが、ヘスターだけはまたもとの湾植民地に戻り、罪の印を再度胸につけて、病気の人、貧しい人、不幸な女性、自分と同じような罪を犯した女性たちのために、希望と勇気を与える奉仕の生活を続ける。そのヘスターもやがて死に、その墓が牧師デムズデルの側に作られる。

この物語における女性像の研究において、大切なことは、若い頃のヘスターが女性の権利の擁護者として描かれているということである。ヘスターはピューリタン社会から村八分にされたわけだが、その孤独の生活の中で彼女は次第に「思索の自由」を身につけ、社会のあり方、特に社会における女性のあり方に関する思索を深くする。そして彼女が得た結論は、「社会における最も幸福な女性でさえも、その生活は生きるに値するものだろうか」ということであり、社会において男性と女性の関係を今よりもっと自由に、そしてもっと平等なものにするためには、「社会はその根底から破壊されて、新しく造りなおされる必要がある」ということであった。作者ホーソーンは、ヘスターのこのような破壊的な考え方は、「ピューリタンの為政者たちが知ったなら、彼女の胸への緋文字で罰した罪よりも、もっと重大な罪だと思っただろう」と述べている(Hawthorne 1850: 199-201)。

『緋文字』の中でヘスターはしばしば、アン・ハッチンソンと比べられている。アン・ハッチンソンはその異端的な思想(反戒律説—聖書よりも、信仰のみが魂の救済に重要であるとする考え方)でピューリタン社会から、ロード・アイランドへと追放された女性である。ヘスターが密かに胸に抱いている思想は、アン・ハッチンソンのそれとは全く別物であるが、作者ホーソーンはアン・ハッチンソンを引き合いに出すことによって、ヘスターの異端的思想を浮き彫りにしている。もちろん、ヘスターは

その破壊的思想をただ胸の中に秘めているだけで、それを実行に移そうとはしない。しかし、作者ホーソーンは、ヘスターに「パールという子供がいなかったら、ヘスターはアン・ハッチンソンと共に歩き、殉教者になったかも知れない」と述べている(Hawthorn 1850: 199)。それくらいヘスターの女性の権利や地位の平等に関する信念は深いものである。

こうして、当時としては進歩的な思想を胸に抱いたヘスターであるが、作者ホーソーンはこのような女性をどう判断し、断罪したであろうか。ホーソーン作品における女性像の研究に関して、ここが一番重要である。なぜならば、ホーソーン最大の傑作と目されるこの作品において、彼の女性像が最も明確に表明されることになるからである。しかし、結論としてホーソーンはこのような女性の考え方、生き方を決して是とはしなかった。それはこの物語の最終章において、ホーソーンが明示している通りである。一度はパールと共にヨーロッパに渡ったヘスターであるが、またボストンに戻ってきたヘスターは、社会の欠陥、特に男女の関係の不平等は若い時の火のような情熱で正すのではなく、「天の時を待つ」神の御心のままに、社会がいい方向に変わるのを待つべきだという考えに変わっている。そして、彼女は悩んでいる女性や虐げられた女性たちにそのように説いて聞かせ、希望を与えているのである。

ニーナ・ベイムは、その著『ホーソーンの生涯の形成』の中で、ヘスターは「素晴らしい女性」であり、この作品の大抵の読者はそのような印象を抱くだろうと述べている(Baym 1976: 12)。もちろん、その通りだと思うのだが、問題は何が「素晴らしい」かである。ベイムはヘスターの上述のような女性の権利運動家的側面が「素晴らしい」と言っている。しかし、ホーソーン的女性像の研究から言えることは、ホーソーンが「素晴らしい」としているのは、ヘスターの若い頃の社会改革的情熱ではなく、それを克服し、異端的思想を捨てて、もっと穏健な思想へと変化していったその過程なのである。だから、ホーソーンがここで提示している「素晴らしい女性像」は、決して社会改革的、権利運動家的女性像ではなく、極めて「保守的」な女性像である。もちろん、ここでいう「保守」とは、社会における男女関係は従来通りでいいという意味ではなく、両者のあり方は男女平等の新しい基盤の上に造り変えられる必要があるが、その達成は、人間の意志や努力

でそうするのではなく、神の御心が社会をそのように変革してくれるのを「待つ」という意味での「保守」である。

## V. 『ブライズデイル・ロマンス』他

『緋文字』は17世紀の湾植民地を舞台にしているのであって、ホーソーンが生きた19世紀のアメリカ社会を舞台にしているのではない。しかし、この作品がいかにも、ホーソーンが生きた当時の社会における女性の権利運動を念頭において書かれたかが分かるであろう。そして、ホーソーンはこの作品においてこの問題に対する彼なりの結論を出したのである。しかし、これが結論であって結論でないことは、誰の目にも明らかであろう。なぜなら、社会は男女の平等に向けて改革される必要があるのなら、それは人間の意志や努力によってそうすべきであって、単に「神の御心」が社会をいい方向に変えるのを待つというのは、結局何もしないのと同じではないのか。「積極的静観」というと聞こえはいいのであるが、それは結局は「現状肯定」に過ぎない。そのようなことはホーソーン自身もよく分かっていたと見え、『緋文字』以降の作品ではこのことが常に彼の頭を悩まし続けるのである。そして、これが『緋文字』以降の作品におけるホーソーン的女性像を規定する一つの要因になっている。これ以後の作品における女性たちは、「積極的静観型」ではなく「積的実行型」の女性になっている。

その典型は『ブライズデイル・ロマンス』のゼノビアである。彼女は、男女の地位の平等を一つの目標とするブライズデイルの共同体に誰よりも早く参加し、その理想に向けて努力している。彼女がこのような運動に深入りすることになった直接の原因は不明であるが、前夫であるウェスターベルトとの不幸な結婚がその一つであることは間違いない。だから、彼女の女性の権利運動には徹底したところがある。彼女は女性の権利の拡充のためには「現在の社会態勢をくつがえすことには何のためならも感じない」のである(Hawthorne 1850: 370)。彼女は男性が女性たちに対して行ってきた不当な扱いについて、詩人であり、かつこの物語の語り手であるマイルズ・カヴァーデイルに対して滔々とまくしたてる。その権幕にカヴァーデイルはただ圧倒されるばかりである。ゼノビアは、社会の男性中心の現状においては、「どの女性も決して幸福になれはしない」と述べている(Hawthorne 1850: 387)。



ゼノビアはまさに女性の権利運動の女闘士と呼ばれるに相応しい。彼女は女性としてのあらゆる容貌、会話・演説の才能、演技の才能、それに財産（後にそれを失うにせよ）に恵まれている。だから彼女は、普通ならば女性の権利運動の拡充において当代の名士的存在になっていはずであった。実際彼女はそのような名声を既に幾分は得ていた。しかし、作者ホーソーンが彼女に与えた運命は、プライズデイルの共同体の近くを流れる河での自殺であった。その直接の原因は、ホリングズワースという社会改革家の男性をめぐってプリシラ（ゼノビアの異母姉妹）と争い、それに敗れたことである。ゼノビアにとって運の悪いことに、ホリングズワースという偏執的な社会改革家は、女性の権利運動を軽蔑し、それに従事する女性を最も嫌うタイプの男であった。

ゼノビアは、プリシラとの三角関係において、女性としてのあらゆる手練手管でホリングズワースのものにしようとしたが無駄であった。自分の愛する男を得る為に彼女は自分の信念であるはずの女性の権利とか平等という考えまで投げ捨てて、結婚したあかつきには貞淑な妻になるとの意志表示をしてまで、ホリングズワースに迫ったが無駄であった。女性としてのあらゆる魅力を備えていながら、ゼノビアがヘスターほどに読者の共感をひかない最大の理由はここにある。つまり、ゼノビアにとって、自分の幸せのためなら、他の女性などどうなってもかまわないのである。物語の最後のほうで、ゼノビアがホリングズワースのことを「利己心、利己心、利己心、あなたにあるのはただ利己心だけです」と、激しく彼を罵倒する場面があるが、彼女自身がやったことは、その本質においてホリングズワースと同じことであった。ただゼノビアの場合、彼女の所有していた財産が父親のムーディーによって、彼女の知らない間に、異母姉妹のプリシラに譲渡されるという情状酌量の要素があるものの、ゼノビアが実行した多くのこと（特に、プリシラをウェスターベルトに引き渡そうとしたこと）は誉められるべきことではない。

このような女性の権利運動の「女闘士」としてのゼノビアの延長線上にあるのが『大理石の牧羊神』の中のミリアムである。ただ、ミリアムの場合、彼女の犯した犯罪が一体何であるのか、作者ホーソーンは絶対に明らかにしようとしないうえ、ミリアムをゼノビアと同様、女性の権利運動線上に置くのは正しくない。しかし、作者ホーソーンは、ミリアム

は既存の社会体制の破壊者として、「今世紀に起こった最も有名な事件の首謀者の一人」としているから、少なくとも何らかの過激な社会改革者であることは明白である。このような「最も恐ろしい事件」の首謀者として、ミリアムはイタリアの官憲によってたえずつけ狙われている。しかし、先に述べたように、ミリアムの反社会的行動の直接の原因は何であるか、実際にどのような破壊的活動をしたのか、作者ホーソーンは沈黙をしているため、ミリアムの女性像に関してはこれ以上のことが言えない。

## VI. 『七破風の屋敷』

ヘスターから始まり、ゼノビア、それにミリアムと続く「社会改革トリオ」はこれで完結していると言える。フィリップ・ラブの言葉を借りれば（Rahv 1941: 362-381）、ホーソーンの「黒髪トリオ」である（これら三女性は、いずれも黒い髪をしている）。そして、後の女性になるほど、その過激性が強まるのである。このような女性像に対してホーソーンがその対抗措置として打ち出してくる女性像は、体制に従順で、貞節で、処女で、明朗な女性像である。その原形は『七破風の屋敷』（The House of the Seven Gables, 1851）の中のフィービーである（これは「太陽」に由来する名前であり、ホーソーンが婚約者のソフィアに与えた愛称でもある）。明朗快活な18才のこのニューイングランド女性は、どこにでもいるような平凡な田舎娘である。しかし、彼女は全てのことに、ことを荒だてるようなことはせず、その愛想のよさ、性格のよさでもって、結局全てをいい方向に導いていくのである。ヘブジバーは七破風の家の一階部分に開いた雑貨店をうまく切り盛りすることはできなかったが、フィービーは、その明朗快活な性質で、自然にその店を繁盛に導く。

アルフレッド・レヴィーは論文『「七破風の屋敷」一愛の宗教』（Levy 1961）において、上記のような性質を備えたフィービーに関して、彼女は「特殊な種類の社会改革者」であることを認識することが肝要であると述べているが、これは卓見である。私はホーソーンの世界に対する態度の研究から、ホーソーンは社会を善導する力は人間ではなく、神のプロビデンスにある一神のプロビデンスこそが人間社会を最終的にいい方向に導くと考えたという説を提唱したが、『七破風の屋敷』の中のこの女性は、その意味で神のプロビデンスの人間版となっている

のである。ホーソーンはそのような女性像を何の臆面もなくここに提示している。先のレヴィーは、このような女性を我々が実感できないのは、文学において曖昧や神秘や裏の意味を期待する20世紀の我々の文学的趣味のせいだと、これまた正しく指摘している (Levy 1961: 189-203)。

意味あいはいくらか違え、このフィービーの延長線上にあるのが、『ブライズデイル・ロマンス』のプリシラである。彼女は当初は、性格、意志、意見があるかといったようなナヨナヨした女性であった。しかし、これは彼女がボストンの安宿において、ムーディーという一見浮浪者のような父親によって育てられた結果であった。しかし、そのプリシラはブライズデイルの共同体において、ふくよかな乙女に成長する。女性の権利運動の闘士であるゼノビアとは対比的に、彼女は世の男性がもっとも好むようなタイプの女性に成長する。この物語において、ゼノビアとプリシラの対比は、非常に際立ったものがある。既に開いた花、非処女、雄弁なゼノビアに対して、プリシラは、つぼみであり、しとやかであり、純情可憐である。プリシラは、女性の権利運動とは一番遠い存在である。そして、両者を比較対象した後のカバーデイル (最終的には作者ホーソーンの分身であると言える) の結論は、「私はプリシラを愛していたのだ！」である (Hawthorne 1850: 600)。この物語を読んだ殆ど全ての読者がいかにも唐突だと思ふことを充分承知のうえでホーソーンはこのように結論を引き出しているのである。いかに作者が、ゼノビアのような女性像ではなく、プリシラのような女性像にひかれたかが分かるであろう。女性の権利運動が最も華やかな頃にこのような結論を出したのだから、これは当時のその運動に対する作者の大きな挑戦である。

そしてさらにこの延長線上にあるのが、『大理石の牧羊神』のヒルダである。ヒルダはニューイングランドの女性だが、絵画の勉強のためにローマに来ており、高い塔の上に鳩(「ハト」というのは、これまたホーソーンが婚約者のソフィアに与えた愛称であった)を友として、一人暮らしをしている。彼女は何事にも潔癖であり、一点の罪やけがれや過失も許すことは出来ない。彼女は思想にも極めて保守的であり、既存の社会体制に従順である。そのことを一番よく表わしているのが、彼女の仕事である。彼女は画家であるが、実際にしていることは昔の巨匠たちの絵を「模写」することである。自分の独自性を発揮して、画家としての新境地を開拓すること

など彼女には思いもよらないことである。そのような彼女に対して、一番ショッキングなことが起こるわけだが、それはミリアムとドナテロが共同して、絶えずミリアムに付きまとい、ミリアムを苦しめていたカプチン派の僧侶を殺害したその現場を目撃したことである。ミリアムとドナテロは彼女の親しい友人であるから、このような場合彼らの話相手になり、助言を与えるのが友人のとるべき態度であると思われるが、ヒルダはまるで、自分の魂が汚されたような気持ちになり、それに苦悶するのである。これは何という冷たい、一人よがりの女性であろうか。ある批評家はヒルダのことを「嫌悪すべき女性だ」と言っているが (Bewley 1963: 183)、まさにその通りである。ところが、これまた理解に苦しむことだが、ホーソーンの分身たるケニオンは、このヒルダを「家庭の中に祭られるべき存在」として尊敬し (Hawthorne 1860: 521)、彼女を自分の生活の師と仰ぐのである。

ここにおいて、最初のフィービーから始まって、プリシラ、ヒルダという「透明人間トリオ」が成立する。なぜ「透明人間」というかというのと、このような女性像は20世紀の我々には「生き身の女性」として実感できないからである。このトリオにおいて、順番が下がる程その「透明性」が高まっている。フィービーにおいては、まだ優しい女性として幾分、血と肉があったように感じるが、最後にヒルダにおいては、何をかいわんやである。これを先の「黒髪トリオ」と一緒にすれば、ホーソーンの名作群においては、この両者が共存し、比較対照され、作者は明らかに後者のトリオの女性像を支持し、そちらに高々と軍配を上げている。

結論として、ホーソーンは彼の作品の中に種々の女性たちを登場させた。それらの女性たちの分析を通して、私たちは彼の女性像を得ることが出来る。短編作品において彼が提示した女性像は、男性の魂を最後には天において救われた存在とする「救い主」的な女性像であった。だから男性にとっては、女性を自己の中に受け入れることが肝要である。そうすることによって男性は「人間の磁力を持つ鎖」に列なり、社会における自分の位置を確認することができる。ホーソーン作品においては、大部分の男性はそうのように女性を自己の中に受け入れることができず、破局を迎えている。そのような女性像は例えば「若きグッドマン・ブラウン」、「ラパチーニの娘」、「美の芸術家」、「あざ」や「大望ある客」(The Ambitious Guest, 1842)に見出される。

1850年以降、つまり、ホーソーンの長編作品において、ホーソーンはその当時の大きな社会運動であった女性の権利運動を念頭において作品を書いた。それゆえ、そこに提示された女性像はそれを反映したものとなっている。例えば、『緋文字』のヒロイン、ヘスターは、若いころはまさに徹底した女性の権利運動家であった。また『プライズデイル・ロマンス』のゼノビアは、女性の権利運動家であり、社会改革家として描かれている。しかし、ホーソーンがヘスターにおいて是としたのは、その女性の権利運動家的、社会改革家的側面ではなく、それを克服して、「天の時を待つ」というヘスターの穏健的態度であった。ヘスター、ゼノビア、それに『大理石の牧羊神』の中のミリアムを加えると、「黒髪トリオ」とでもよべる女性像が成立する。

これに対してホーソーンが強調した女性像は、『七破風の屋敷』のフィービーにはじまる、明朗快活、従順無垢の価値観を具現した女性像である。これはフィービー、『プライズデイル・ロマンス』のプリシラ、『大理石の牧羊神』のヒルダによく現われている。これら女性たちは、その後アメリカ社会に広く浸透することになる「お上品な伝統」の典型である。これらのトリオは、先の黒髪トリオと顕著な対照を為している。そして、ホーソーンは最終的には、前者の女性像が自分の好みに最も合っていることを明確にした。当時としては、めずらしく女性に関する問題を深く考えたホーソーンがこのような結論に達したのは、ある意味では彼の限界を示すものである。しかし、我々は彼の女性像のこの面ばかり観るのではなく、その全てを十分に鑑賞すべきであろう。

#### 参考文献 (英文)

- Arvin, Newton, ed. 1929. *The Heart of Hawthorne's Journal*. New York: Barnes and Noble.
- Baym, Nina. 1976. *The Shape of Hawthorne's Career*. Ithaca: Cornell University Press.
- Bell, Michael D. 1971. *Hawthorne and the Historical Romance of New England*. Princeton: Princeton University Press.
- Bewley, Marius. 1963. *The Eccentric Design: Form in the Classic American Novel*. New York: Columbia University Press.
- Colacurcio, Michael Joseph, Jr. 1972. *The Poetry of Piety: Moral History in Hawthorne's Early Tales*. Cambridge: Harvard University Press.
- D'Avanzo, Mario. 1976. "The Ambitious Guest in the Hands of an Angry God." *English Language Notes*.
- Doubleday, Niel F. 1972. *Hawthorne's Early Tales: A Critical Study*. North Carolina: Duke University Press.
- Erlich, Gloria C. 1984. *Family Themes and Hawthorne's Fiction*. New Jersey: Rutgers University Press.
- Hawthorne, Julian. 1968. *Nathaniel Hawthorne and His Wife*. 2 vols. Hamden, Conn.: Archon Books.
- Hawthorne, Nathaniel. 1850. *The Scarlet Letter and The Blithedale Romance* (The Works of Nathaniel Hawthorne, vol. V). Boston: Houghton, Mifflin and Company.
- Hawthorne, Nathaniel. 1851a. *Twice-Told Tales* (The Works of Nathaniel Hawthorne, vol. I). Boston: Houghton, Mifflin and Company.
- Hawthorne, Nathaniel. 1851b. *The House of the Seven Gables* (The Works of Nathaniel Hawthorne, vol. III). Boston: Houghton, Mifflin and Company.
- Hawthorne, Nathaniel. 1854. *Mosses from An Old Manse* (The Works of Nathaniel Hawthorne, vol. II). Boston: Houghton, Mifflin and Company.
- Hawthorne, Nathaniel. 1860. *The Marble Faun* (The Works of Nathaniel Hawthorne, vol. VI). Boston: Houghton, Mifflin and Company.
- Hull, Raymona. 1980. *Nathaniel Hawthorne: The English Experience, 1853-1864*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- Kesslerling, Marion. 1975. *Hawthorne's Reading: 1828-1850*. New York: New York Public Library.
- Lee, A. Robert, ed. 1982. *Nathaniel Hawthorne: New Critical Essays*. New Jersey: Vision and Barnes and Noble.
- Levy, Alfred. 1961. "The House of the Seven Gables: The Religion of Love." *Nineteenth Century Fiction* 16: 189-203.
- Male, Roy R. 1957. *Hawthorne's Tragic Vision*. New York: W.W. Norton and Co.
- Miller, John C. 1986. *The First Frontier: Life in Colonial America*. Lanham: University Press of America.
- Poe, Edgar Allan. 1969a [1842]. "Review of Twice-Told Tales," in Bernard Cohen, ed., *The Recognition of Nathaniel Hawthorne*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Poe, Edgar Allan. 1969b [1847]. "Tale Writing: Nathaniel Hawthorne," in Bernard Cohen, ed., *The Recognition of Nathaniel Hawthorne*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Rahv, Philip. 1941. "The Dark Lady of Salem." *Partisan Review* 8: 362-381.
- Smith, Allan Garden Loyd. 1984. *Eve Tempted: Writing and Sexuality in Hawthorne's Fiction*. New Jersey: Barnes and Noble.
- Terence, Martin. 1965. *Nathaniel Hawthorne*. New Haven: College and University Press.
- Turner, Arlin. 1980. *Nathaniel Hawthorne: A Biography*.

New York: Oxford University Press.

- Ulrich, Laurel Thatcher. 1982. *Goodwives: Image and Reality in the Lives of Women in Northern New England, 1650-1950*. New York: Alfred A. Knopf.
- Ward, Barbara. 1989. "The Past, the Present, and Hawthorne's Romantic Imagination." *Proceedings of the 1988 Conference of the Nathaniel Hawthorne Society*, pp. 1-122.
- Wollstoncraft, Mary. 1975 [1792]. *A Vindication of the Rights of Women*. New York: W. W. Norton and Company, Inc.

参考文献 (邦文)

- 青山義孝. 1991. 『ホーソン研究—時間と空間と終末的想像力』東京: 英宝社.
- 鴨川卓博. 1993. 『「語られた」歴史—ホーソンの歴史物語』神戸: 神戸外国語大学外国学研究所.
- 神徳昭甫. 1992. 『炎と円環—ホーソンの文学の両義性』東京: ニューカレントインターナショナル.
- 田中久男・常松正雄編. 1994. 『アメリカ文学研究資料事典—アメリカ研究図書解題』東京: 南雲堂.
- 辰巳 慧. 1983. 『ラバチーニの娘—ホーソンの作品研究』東京: 晃洋書房.
- 林 信行. 1983. 『ホーソン, メルヴィルとその周辺—文学のなかの人間像』東京: 北星堂.
- 林 信行. 1994. 『ホーソンとメルヴィル—ホーソンの戦時紀行文, その他』東京: 成美堂.
- 師岡愛子. 1993. 『ナサニエル・ホーソン研究ノート』東京: 表現社.
- 山本 雅. 1982. 『ホーソンと社会進歩思想—神慮と進歩』東京: 篠崎書林.